



フィグ・ヤーパン通信

第11号

FIGU-JAPAN BERICHT, Nr.11

発行日 2002年7月1日

発行 フィグ・ヤーパン <http://jp.figu.org/>

『宇宙の深遠より』

— 地球外知的生命プレアデスとのコンタクト —



地球外知的生命プレアデス／プレヤール人とのコンタクトについて書いたこの本を、日本語でご紹介できることは私にとってこの上ない幸せです。読者の皆さんの好意あるご評価をいただければ光栄に思います。そして、この本が皆さんのご期待に沿うことを願い、私の体験した地球外知的生命との

コンタクトや、私自身について知っていただく一助になればこれほどうれしいことはありません。

プレアデス／プレヤール人とのコンタクトとそれに関わる諸々の事柄を主題とし、自然、創造の教えと人類の発達にも触れるこの本の持つ意義は重要なものであると信じます。ここに記された事実は皆さんにとってまったく新しいか、あるいは少なくとも一部は未知のものであると思いますが、これをもとにじっくりと熟考することにより、そこから今まで未知であった事実への扉が開かれると確信します。

さらに私の数十年にわたって現在もなお続くコンタクトが、一般に解釈され、主張されているものとはまったく違った性格のものであることもお判りになることでしょう。読者の皆さんにありのままに知っていただくために今もなお続く出来事のうち、何を選択して書くべきか思案しました。そして慎重に考えた結果、皆さんの共感を得るとともに、今まで応えることができなかった多くの疑問に回答を提出することを願って著したものです。この本を読むことに意義を見出された読者の皆さんに謝意を表します。

(日本語版によせて ビリー・マイヤー)

新刊 『第235回会見』



1990年、2月3日に行われた、プレアデスの惑星エラからやって来た地球外知的生命 JHWH プターとの会見記です。特に重要な意義を持ったこのコンタクト記録は、小冊子にまとめられ、オリジナルにはドイツ語原文の他に英訳が添付されて出版されています。この会見で、プターは

次のようなテーマについて解説しています。

- ・ 地球外知的生命体や高度な霊形態、あるいは霊水準とコンタクトを持つ地球人の現状及び将来の予定
- ・ 日本をはじめ、アメリカやヨーロッパで地球外知的生命や高度な霊形態とコンタクトを持つと自称する多くのコンタクティやチャネラーの真偽
- ・ 世界各地で報告されている穀物畑における UFO の着陸跡や UFO 目撃情報の真偽
- ・ 一夫多妻の法則に従った、プレアデス／プレヤール人のエラ惑星での生活
- ・ 世界各地で生じる地震や地殻変動及びこれらの災害の根本的原因としての地球人類による大気汚染、放射能汚染、原爆実験等の大気圏の破壊について

『宇宙の深遠より — 地球外知的生命プレアデスとのコンタクト』は、徳間書店発行、定価 2800 円 (税抜き) で、全国の書店にてお求めいただけます。『第 235 回会見』は、フィグ・ヤーパン発行、定価 500 円 (税込み) で、フィグ・ヤーパンにて販売しております。詳しくは巻末をご覧ください。

テロリズムについて、ビリーかく語る

アメリカで2001年9月11日に発生した同時多発テロとその後の対応をめぐる、戦争と隣り合わせの未解決な問題に世界中が巻き込まれています。この事件をどのように考えるべきか、読者から多くの質問がスイス FIGU に寄せられました。ここでは、その中から「FIGU 公報 36 号」に掲載された読者の質問とビリーによる回答を紹介します。

□ 読者の質問

あらかじめお願いしますが、私が滞在している国と住所は公表しないでください。名前は出しても構いません。私は宗派はユダヤ教ですが、イスラエルに住んでいる同胞たちがアラブ人に対してやっていることには納得できません。彼らはアラブ人に最悪のテロ行為や、さらには見境のない殺戮を加えています。同じことがアラブ人の側からもイスラエル人に対して行われています。これに同意することはできません。ですから双方の民族が互いに憎しみ合うことをやめ、平和を創り出すため何ができるかについて考えを巡らせています。「ビリー」ことエドゥアルト・アルベルト・マイヤーさん、明確なアドバイスを与えてくれませんか。人間であること、ユダヤ人であることを恥ずかしく思うことがますます多くなっています。

シモン・ヌッセイバー

□ 質問に対するビリーの回答

私は政治的なことに係わり合うつもりはない。というのも私の使命は、宗教やその他の愚かな理由から互いに相手を根絶しようとしている民族の仲立ちをすることではないからである。彼らは憎悪と狂信に駆られて自分たちの小さい子供を殺人機械に仕立て上げ、理性的な助言には少しも耳を傾けようとはせず、採算の取れるまともな仕事をするよりも、殺人や「戦争ごっこ」の方をずっと好んでいる。これは、武装したあらゆる人間たちにも当てはまる。彼らは自分たちの国を防衛し、あるいは奪回しなければならぬと思いついており、理性と愛により真の平和と真の自由を、それも広範で持続的な共存という形で実現しようとは思ってもいないのだが、実はこれこそ本当に人間に相応しいことだろう。だが、惑わされた者、馬鹿者や愚か者、殺人者や狂信者、権力欲に駆られた者などに、そうさせるのは極めて難しい。なぜならば彼らの理解力が十分でないために、真の理性を捉えて正しいことを認識し、自分たちの独断や権力欲、たぎるような憎しみや火のような狂信を捨て去って、明晰で人間的な思考を始めることができないからである。それはまた知性が

欠落していて、理性的な思考とそこから生まれる理性的な感情を獲得することができないためである。そこには最悪の語義での「原始性」が支配しており、これを理性で凌駕することは、それに必要な知性が欠けているため全く不可能である。良いアドバイスを求めている質問に関して、助言すべきことは何もない。なぜならば、理性的に思考する能力がない者に、理性と論理で教示することはできないからである。だから残忍で理性を欠いたすべての愚か者は互いに虐殺しあい、最後に絶滅するしかないのである。そうした連中が犯罪組織の人間であるか、あるいは人殺しやテロの権利を持っているなどと思いついでいる国家の人間であるかはどうでもいいことだ。こうした連中は人殺しやテロを自己防衛だとか国家防衛などと呼んで、他の集団や国家の同志から支持され、また歓迎されているだけである。以上がこの地球上のさまざまな国や、この驚くべき世界の数多くの革命地域や戦争地域で得た私の意見と経験である。この世界は、野蛮かつ犯罪的で戦争や革命に飢えた馬鹿者どもによってますます駄目にされている。ところが連中は、まさにそのために自分たちが称賛され、勲章や金銭を授与されるべきだと信じているのである。

残念ながら、私は的確な助言を与えることができない。なぜなら、ロバは喉が渇いていなければ、決して水を飲もうとはせず、すねて歩かないばかりか、暴れさえる。こうした振る舞いをしているのは、なにもアラブ人とイスラエル人に限ったことではない。イギリス人と北アイルランド人、アフガニスタンのタリバン、どこにでも首を突っ込むアメリカ人、そしてかなり以前から NATO もそうである。セルビア人、アルバニア人、マケドニア人、イラク人とイラン人、その他多くの国民もこれに属している。彼らはみな戦争とテロを促進するだけで、平和や愛や自由を促進することはない。なぜならば邪悪でむき出しの暴力を用いる彼らの許しがたい行いは、再び新たに邪悪でむき出しの暴力と憎しみと復讐心とを生み出し、それがまた絶えず新たな流血や殺人や殺戮を招くからである。これは決して許されるものではない。なぜならば、そうしたすべてのことは人間性や生命に対する畏敬を、したがって人間存在、愛、正義、自由、そして平和の尊厳に属する一切を愚弄するものだからである。

さまざまな集団を虐殺や殺人やテロリズムに向かわせる宗教的・狂信的な観念、思想、感情および情動が非常に多く存在する。それは特にアイルランド、バルカン半島、そしてアフガニスタンなどに見られる。ここでは一般に狂信主義と非人間的な質的悪化が甚だしく、墮落し、残忍で、憎しみに満ちており、罪のない子供たちや女性までが、文字通り血と殺人に飢えた非

人間的な欲望の餌食となってむごたらしく虐殺され殺戮されている。そして最も苦しい目に会わなければならないのは、まさにこれら罪のない子供たちや女性たちなのである。なぜならば、戦争屋や殺人鬼は戦争ごっこの妄想と宗教的な狂気と怠惰のとりこになっていて、ただ働くよりも、殺したり、強姦したりすることを好むからである。しかし戦争や殺人、女子供の虐待や強姦は、拷問や死刑と同様、許されるものではない。これについて最後に一言だけ述べるならば、どんなに凶暴な猛獣でも、たとえそれが「人食い獣」に墮していようと、墮した人間が他の人間に対してなすほど、あまりにも野蛮に、血や強姦や拷問や狂気や憎悪や復讐心に飢えて殺したり、殺害したり、生き物を大量に虐殺したり、殺戮したりはしない。

□ 読者の質問

今日（ビリーの註：2001年9月11日）、アメリカで恐ろしいテロ攻撃がありました。おそらく数千人の命が奪われ、さらに新たな攻撃が予想されています。つまり「世界貿易センター」と「ペンタゴン」の破壊、それに「キャンプデイビッド」の破壊未遂だけでは終わらないでしょう。世界中に広がるテロを根絶するために、私たちは本当に何もできないのでしょうか。テロは問題を解決して、平和を創り出すことのできる手段ではありません。あなたはどう思いますか。FIGU公報でコメントしてくださいませんか。

ノルディ・ヨゼフ（スイス）

□ 質問に対するビリーの回答

同様の、または類似の質問およびテロリズム対策に関する提案を、いろいろな国から受け取ったが、それについてここでコメントする。

テロに対して暴力をもって対抗するということが安易に言われているが、その結果何が生まれるかについて熟慮すべきであろう。というのも原則として暴力は再び暴力を生み、その連鎖はとどまるところを知らないからである。もめごと、戦争、革命、蜂起などが起きるところではどこでも、まさに「やられたら、やり返す」とか「暴力とテロの種を撒く者がその果実を手にする」という古くからの言い習わしのとおり、攻撃には反撃をという原理が支配しているのである。

シモン・ヌッセイバーがイスラエルとパレスチナにおけるテロ行為に関して質問したとき、私はこの問題について詳しくコメントしたが、アメリカでのテロ事件を受けて、さらに幾つかのことを述べようと思う。ここでも政治に関わることなく、私の中立的な意見を述べるにとどめたい。基本的にいかなる種類のテロリズムも人間およびあらゆる国民のすべての権利を犯す

ものであり、テロリズムが無政府主義組織、宗教組織、教派組織によるものか、あるいは個人の犯罪者や復讐心を持った連中、さらには政府、軍隊および諜報機関によって行われたものであるかは関係ない。そしてまさしくこの政府、軍隊および諜報機関により、実に多くの国家がテロ行為をおこない、正義と人間性を同等にあざけり笑っているのである。このテロリズムは他の国の内政や外交上の問題に干渉するという形で、出る幕ではないにもかかわらず、しばしば実行される。そうやって政府を崩壊させ、干渉者の気に入る別の政権にすげ替えるのである。この目的にとって好ましくない政府側の人間は殺され、虐殺され、爆破され、あるいは何らかの形で「片づけられる」。その場合、まさにアメリカの例が最もよく示しているように、テロリストたちは列車や船や航空機をのっとして爆破する、つまりそれらを武器として使うことも珍しくない。しかもそれは宗教や教派の狂信者、無政府主義者および犯罪者に限られることなく、政府、軍隊および諜報機関がおこなうこの種の行為に関しても当てはまる。とりわけある国が他国の事柄に干渉し、テロ行為さえ厭わないという場合はそうである。ただしこれらのテロ行為は必要な措置、安全保障上の措置、報復行為、自己防衛、さらには平和や世界や国の安全を守る行為としてカムフラージュされる。その結果、テロリストや攻撃者に対して、すでに存在しているか、あるいはこれから生まれる狂信的な憎しみや血に飢えた復讐心が勢いを増し、逆テロ行為が助長されて新たな燃料や爆薬を獲得することは、火を見るより明らかであろう。暴力が再び暴力を生むために、テロリズムはつねに新たなテロリズムをあおり立てるのである。

テロリズムとは、常にテロリスト側に正当または不当に加えられた何らかのことに對するし返しである。何らかの理由で、1つまたは複数の国といがみ合っている国に対して、別の国が同情を示したり、保護したり、武器や食糧を援助したり、その他の仕方で援助したりすることでさえ、敵対国にとっては報復の根拠となる。ある国が世界警察を気取って、ずうずうしくも他国のもめごとに介入したり、競合している2つの当事国の間に入り、あるいはいずれか一方をひいきにして、他方をないがしろにしたり、これと争ったりすれば、テロが芽生える。つまりそれによって憎しみと復讐心があおり立てられ、そこから殺人、殺害、破壊および犯罪が生まれるのである。それらはたいがい自滅的な狂信となって現れ、それによって論理と人間性と人間の尊厳のあらゆる境界が踏み越えられ、悟性と理性のかすかな残りを見いだそうとする可能性も踏みにじられる。

テロリズムに対して何ができるのか、またテロリズ

ムは根絶すべきかという質問に関して、私は、テロリズムに対していったい何をどうすればいいのか問わなければならない。テロリズムを根絶しなければならないというのは正しいが、それはあからさまな暴力によって達成できないことだけは確かである。そして何よりも言うておかなければならないのは、テロをおこなっている張本人である政府や軍隊や諜報機関も、やはり根絶しなければならないということである。自由のための戦いをしていると称したり、自分たちの宗教や教派を極端にも原理主義の形で唯一の世界宗教または世界教派にしようとしたりする狂信者たちにも同じことが言える。彼らにとっても、犯罪そのものとしてまたは個人的な復讐心から、あるいは政府、軍隊、諜報機関として行為し、多くの国々や人類全体に窮乏と死、破壊と破滅、そして苦悩と悲慘をもたらしている連中と同じく、いかなる殺人行為もごく当然のことなのである。

人間の生命を要求し、破壊と破滅を招くあらゆる種類の行為は、それらが正当防衛、つまり生命や国の防衛ではなく、攻撃的な性格のものであるかぎり、いかなる場合もテロである。しかもそれらの行為が宗教や教派により、テロ組織や犯罪者により、あるいは個人の復讐心や嫉妬から、さらには政府、軍隊、国家または民間組織の諜報機関によってなされるかは全く関係ない。

テロは逆テロを生み、あからさまな暴力はまたもやあからさまな暴力を生むのである。だから暴力やテロや、その他の犯罪や何か不正なことを犯した者には、ある日、何らかの形でそのつけが回ってくるのである。だからいかなる国家も人間も、自分の側から暴力やテロ、あるいは犯罪や、単に何か不当なことをしてかした以上、いつか同じように暴力やテロに見舞われたとしても驚くには当たらない。これが私の意見であり、私の知覚と認識であり、私の知識、私の知恵、私の経験、私の体験、そして私の良心である。

テロリズム、暴力行為、暗殺についてさらに言うておくことがある。テロリズムを遂行したり、暴力行為や暗殺などをおこなったり、外国のもめごとに干渉したりする連中は、それが誰であろうと、個人、組織、あるいは国家やその政府、軍隊、諜報機関であろうと全く関係なく、自分たちが引き起こすあらゆる苦しみ、悲しみ、災厄、破壊や破滅、そして凄まじい苦悩や悲慘をみじんも顧みることなく、むしろ喜び、歓喜の叫びをあげ、それらをネタにほらを吹く。しかし彼ら自身が被害を受け、自分たちがしたことへの報いを受けると、彼らはそれまでに世界中に何万回、いや何百万回も殺人、破壊、腐敗、破滅をばらまいてきたにもか

かわらず、自分たちは少なくとも罪もないのに攻撃されたと感じたり、思ったりするのである。そして実際に自分たちが被害にあうと、彼らは大きな声で泣き叫び、歯を震わせる。しかしそれからすぐに、あらゆる不安や衝撃や驚愕は影をひそめ、際限のない狂信的な憎しみや、地獄のような復讐心や、報復が頭をもたげる。そのうえ、逆テロ行為、報復および復讐行為などにより新たな不幸、流血、悲惨、苦悩、そして新たな破壊と破滅が引き起こされると、世界はまさに彼らに同情を示し、不正と人間を侮蔑するテロ行為のためにありとあらゆる支援を提供する。そしてこれまで彼らが世界中で、あるいは自分たちが同情を寄せたどこの地域で、どれほど多くの苦悩、困窮、悲しみ、惨めさ、そして破壊と破滅を引き起こしてきたかは問わないのである。

墮落した宗教的原理主義や、その他の宗教的、狂信的な狂気や、極右主義や、国防軍や諜報機関のテロ策謀によって引き起こされるものは、どれもおぞけを震うものであり、ますます多くの罪のない人間の命を奪っていることは言うまでもない。だがしかしそれは同じような手段で、場合によってはもっとひどいやり方で、逆テロ行為などをおこない、新たに無数の罪のない人間の命を奪うことを正当化するものでは決してない。そうした行為は憎悪と狂信主義と復讐心をさらに助長し、何かを良くするどころか、すべてをもっと悪くし、ますます收拾をつかなくさせる。それゆえいずれの当事者の側にも弁解は成り立たず、テロや暴力行為、暗殺、逆テロ、憎しみや復讐の行為、報復措置は決して正当防衛とは言えない。なぜならば、正当防衛はいかなる場合も、突然加えられた攻撃を防がねばならないケースでのみ成立するものだからである。しかしすでに行なり攻撃なりが起こってしまえば、正当防衛は成り立たない。したがって残されているのは正当な処罰の可能性のみであるが、これはいかなる場合も論理的、人間的な、生命を敬う形で遂行されるべきである。しかしまたこのことは、正当防衛が成立しない以上、罪人を殺したり殺害してはならず、適正に処罰すべきであるということの意味する。この処罰は、最悪の場合には社会から一生隔離し、社会から遮断された状態で、ある特定の論理的で人間に相応しい原理に従って執行されるべきである。

さらに次のことはどうしても述べておかなければならない。暗殺をおこない、暴力やテロを称賛し、神聖化し、実行する者は、病者の集団であり、政治、宗教、教派、諜報機関および軍隊の特殊部隊であり、彼らはその誤りかつ病んだ、狂信的で憎しみに満ちた、復讐心に駆られて報復を目論む狂った非論理的な人間蔑視の立場から、そしてその病的な思考と感情から、予測

もつかない残忍なことをする。彼らはみな良心も人間の尊厳のかけらもない家畜化された輩である。彼らを、暴力犯や暗殺犯、テロリスト、狂信的な人種差別主義者、信仰排他主義者、そして政治的逸脱者どもが帰属する国家の誠実な市民と、絶対に同一視してはならない。いかなる国家の普通の市民も、この人類犯罪的なならず者に協力して手を差し伸べ、その行為を寛恕し賛同しない限り、決してこれらの墮落した者どもと同等に扱ってはならない。この点では信仰も、それが狂信的に墮落し、地獄のような憎しみや、血に飢えた残忍な復讐欲と報復欲から生じているのでなければ、問題ではない。

信仰の異なる者を、墮落した犯罪者、暗殺者、犯行者、テロリスト、狂信的な宗教原理主義者、教派主義者、その他の蔑むべき輩と同じ信仰に帰依しているからという理由だけで、追放したり、迫害したり、苦しめたり、攻撃したり、あるいは拷問したり、傷つけたり、殺したりしてもよいと考え、感じ、さらにはそれを行動に移すのは誤りである。同様に、犯罪者や犯行者やテロリストの輩を生み出している国の国民だからという理由で、そのようなことをするのは誤りであり、不当である。そうした輩もその非人間性や人間的な尊厳の欠如にもかかわらず、人間的な本質からなっており、したがって同様の報復措置やテロ行為で対処したり、しっぺ返しの報復をしたりすべきではない。正しいのは彼らのために人間的で正当な道を見いだすことである。それは、彼らを同じくテロなどによって殺すことなく、一生人間の社会から隔離し、厳しい労働によって彼ら自身の生計を営ませ、贅沢なことはさせないが、彼らが自分たちの考え方を改めて人間らしくなるために必要なすべての教育を与えることである。そうすることによってのみ彼らは自分が犯した罪を自覚し、彼らを苦しめている良心の重荷によって学び、生命に値する者となるのが可能なのである。

テロと報復について考えること

戦争、暗殺、憎悪、復讐、報復、その他のテロは、これらを撲滅し、不正、殺人、殺害および大量虐殺、その他の非人間的な行為を贖う手段、あるいは正義と平和を創り出そうとする方策では決してあり得ない。なぜならばテロに逆テロで報復することは、新たな戦争と憎しみ、新たな暗殺と報復、そして新たな復讐と、その他の新たなテロを意味するからである。正義と平和に到達するには1つの道しかない。それは平和的な理性と、隣人愛と、人間性と、そしていかなる人種や宗派に属しようとするすべての人間を人間として扱う平等の道である。しかしこのことはまた、人間と人間

存在のあらゆる権利に違反し、人間性を欠いた獣のような振る舞いで生命そのものを恐怖に陥れる犯罪者の処罰にも当てはまる。犯罪者は、罪のない者にも災禍が及ぶテロ手段で裁決してはならず、唯一犯罪人に相応しい手段でのみ裁かなければならない。しかしこれらの手段もまた、公正かつ人道的でなければならず、殺してもいいのは本当に正当防衛の場合のみである。犯罪者を捕らえたとき、有罪判決と刑の執行は、人道的で、公正で、適切なものでなければならず、決して死をもって罰してはならない。死刑は同じくテロ、憎しみ、復讐、残酷な報復を意味するからであり、死刑を擁護する者、みずから実行する者は、人間を蔑視した、非人道的で、残酷で、非人間的なテロリストや、計画的な殺人者自身と同類である。

ビリー

信仰と信仰の異なる者について考えること

私自身はどのような信仰もそれ自体として許容するが、たとえば狂信主義およびカルト儀式によって、血なまぐさい殺人や自殺の形式、行動、策謀となって現れる信仰の不正や非人間的な墮落は認めない。だが、私は信仰の異なる人間に対してその信仰ゆえに反対したり、彼らを蔑視したりすることは決してない。なぜならば私にとって非常に重要なのは同胞に対する愛、そしてまたその意見、その信仰、その生活に対する畏敬の念であり、彼がキリスト教徒であるか、イスラム教徒であるか、ユダヤ教徒であるか、ヒンズー教徒であるか、仏教徒であるか、あるいはその他の教派に属しているかは全く関係ないからである。だから私は外国人も決して拒まず、尊敬して敬意を払い、いつどんな場合でも理解し、その価値を発見しようと努めている。しかもそれはまさにすべての個人に言えるのであり、その人間を私が知っているかいらないか、また彼がいかなる宗派、政治的あるいは世俗的な思想集団に従っているか、さらにどんな社会的階層に属しているかは全く関係ない。これも確かに言えることだが、私は一度たりとも何らかの意味において人種差別主義者だったことはないし、これからも何らかの形でそれに掛かり合うつもりはない。さらに私は思考においても感情においても中立的な態度を取っている。だからこそ私はいかなる点においても、たとえ同時代の多くの人間にとって都合が悪いときでも常に自由で正直な意見を言うことができるのである。私はこれらの人間の下賤な、あるいは犯罪的な策謀を槍玉にあげるが、それは敢えて誰も公然と言おうとしない事実を指摘するにすぎないのである。

ビリー

地球の人間たちへ！

アトランタ・ビエリ（スイス）

天空が炎に包まれる時代がある。地球が裂けて大海が大地を飲み込み、何千もの人間が命を失う時代がある。母親が自分の子供と永久に引き離される時代がある。好きになった者同士がもう会えなくなり、友人たちが永遠に離別し、最愛の者が炎熱地獄に落ちる時代がある。権力に対する欲望が確実な未来への希望を奪う時代がある。狂信的な世界観が愛への願望を圧殺し、憎しみが共生の努力を葬り、生命をその限りない豊かさにおいて敬い守ろうとする意志よりも、殺そうとする意志の方が強い時代がある。

こうした闇と狂気の時代にもかかわらず、君たちではできるだけ微笑むことを忘れてはいけない。太陽が地平線から昇り、新しい1日が始まる時、喜ぶことを忘れてはいけない。自分自身を、そして君たちがその上に立っている大地を愛することを忘れてはいけない。自分の名前と本質を忘れてはいけない。君たちは1度限りの人生を愛するためにこの世界に生まれてきた人間であることを忘れてはいけない。焦土と化した地球から、いつか新芽が顔を出して、新たな始まりを告げるだろう。君たちはそれに感謝することを忘れてはいけない。

この地球上には多くの文化が、多くの民族や種族が共存している。それらはみな互いに違って、異なる世界理解を持ち、それぞれ独自の哲学をより所にしている。幾つかの哲学は内容が非常に異なっているが、別の哲学はそれほどでもない。幾つかの哲学は互いに一致しているが、別の哲学は矛盾し合う。人間の数だけ教義が存在する。熱心な若者はその教義に熱心に従うだろう。狂信的な若者はその教義に狂信的に従うだろう。だが「狂信的」とはどういう意味か。それは、2人の人間が互いの意見を述べ合うときに、もはや友好的に対話できないことを意味する。それは、砂漠で出会ったときにどちらも手を差し出さずに、互いに抹殺しようとすることを意味する。それは、相手の援助を受けるよりも、死んだ方がましだと思ふことを意味する。

狂信とは、急速に広がる疫病のようなものである。一度これに感染した者は、短時間に他の多くの者にそれを伝染させる。それは燃え盛る火のように人間を燃え立たせて、その理性を消耗させ、思考の多様性に対するまなざしと、異質なものに対する許容性を失わせる。狂信とは、風を切り裂いてまっすぐその目標地点に向かって突き進む矢のようなものである。それは決して自分の意思で止まろうとはせず、軌道からそれることも、その鋭い矢じりを落とすこともない。最後

に矢がその標的の奥深くまで突き刺さると、誰も再び引き抜くことはできないのである。

このような人間が我々の青い地球に大勢住んでい。彼らはもはや振り捨てることのできない思想に捕らわれ、盲目的な熱意で自分たちの観念のために戦う。彼らは同胞の命だけでなく、自分たちの命も敬おうとしない。彼らは一度敷いた軌道に厳格に従う。彼らが進む道に人は大きな痛みを見いだす。そして彼らの軍団が通った後には何も残ってはいない。

彼らを見た者は、どうして人間はこれほど傍若無人に、これほど病的に、そしてこれほど残虐になり得るのかと自問するだろう。人は彼らの行為に激怒するが、すぐに深い悲しみに沈むだろう。それは犠牲者の悲しみである。家族や友人を失った者の悲しみ。地球の民族が平和に共存できず、暴力を用いずに紛争を解決できないことの悲しみ。人間は自分の中に沈潜して、なにもも永遠に堅固ではなく、なにもも永久に存続しないこと、そして憑かれた革命家や世界変革者の死をもたらす観念を前には安全も保護も存在しないことを悟るだろう。健全な世界の夢がいかに脆いか、どれほど素晴らしい宮殿や建造物でもあつというまに廃墟と化し得るものであることを理解するだろう。そしてその悲しみはすべての人間を捕らえ、涙が大海を満たすだろう。

しかしこの悲しみはそれ自身の内に芽を宿し、やがてその芽は育ち、その涙を吸って植物のように繁茂し、ますます大きく、強くなっていく。ここに肥沃な土壌を見いだすのが憎しみである。憎しみは、最初は明澄な思想をまるでペールのように覆って、アヘンさながらに麻痺させる。憎しみのめまいの中で報復の願望が次第に強まり、復讐しようとする意志が理性に代わって登場する。このとき犠牲者はもはや犠牲者ではなく、復讐者である。そして彼らは自分たちに苦しみを与えた張本人を仕留める計画を中止できなくなってしまう。その目は盲目となり、意識は濁り、感情も鈍るが、彼らの内にある狂気じみた観念は強大で、彼らを絶え間なく、仮借なく駆り立てる。こうして彼らは狂信者となるのである。

これで完結する。

空は燃え、大地は揺れるだろう。軍隊は互いに戦う。しかし、彼らはなんのために戦うのか、なんのために死ぬのか、なんのために生きるのか知らない。こんな戦争をやめさせよ！狂気が君たちの行動を規定するのを許すな。賢く、正しく決定せよ！

攻撃されたら防御しなさい。だが、正当な理由なしに殺してはいけない。自分で決めたことは果たしなさい

い。ただし、必要な程度にとどめるべきだ。自分たちの権利と自由のために戦いなさい。しかし、罪もない人間を犠牲にしてはいけない。自分たちの人生を正しいと思う通りに生きなさい。しかし、多くの人間にはそれぞれの人生があることを忘れてはいけない。自由に行動しなさい。しかし、たとえ全員が同じように行動したとしても、なおも息つける程度にしなさい。自分が信じるべきものを信じなさい。だが自分の信仰を他人の信仰の上位に置いてはいけない。自分たちの祖国にあっては愛国者でありなさい。しかし君たちは同じ地球の市民であることも忘れてはいけない。自分の意見を言いなさい。ただし、他人の意見も聞こえるほどの声で。君たちが何をしようとも、犯罪はいつか必ず罰せられることを忘れてはいけない。だから犯罪者のように振る舞ってはならない。小さいボートに乗って未知の陸地に向かって進む兄弟姉妹のように振る舞いなさい。外の世界には多くの危険があるが、最大の危険は君たち自身である。船を転覆させてはいけない。人生の川を穏やかに漕いでくだりなさい...

フィグ・ヤーパンからのお知らせ

□ 事務所を開設しました □

フィグ・ヤーパンは、翻訳出版をはじめとする総合的な作業を一括して行う事務所を開設しました。これまで、在庫管理や発送、伝票処理、印刷などの各種作業は、分担してスタッフ各自の住居で行ってきました。しかし、スタッフの住居は現在、関東から九州地方まで各所に離散しており、共同で作業を行うことが困難でした。一方で今年の『宇宙の深遠より』翻訳出版やホームページの開設に伴い、関連する作業が増加しております。これまでのように分散したスタッフの住居で、スタッフの家族の協力を得ながらの活動では、限界があります。こうした問題を解決するため、フィグ・ヤーパンの作業を一元的に、効率的に行う事務所を設置することが検討されてきました。

フィグ・ヤーパンでは、設立 10 周年を契機に事務所を設立し、より一層翻訳出版を推進していきます。フィグ・ヤーパンの活動にどうぞご期待ください。

□ ボランティア募集 □

フィグ・ヤーパンでは、フィグの活動に自由意志で参加できるボランティアスタッフを募集中です。具体的な作業内容として、校正、発送、データ入力、全国読者会の運営等があります。ご協力いただける方は、フィグ・ヤーパンまでご一報ください。ボランティアスタッフとして登録させていただきます。

□ 援助金のお願い □

フィグ・ヤーパンの予算の大半は翻訳出版で占められています。ビリーとの契約によって、ドイツ語から日本語への翻訳を正確に行うため、翻訳校正には異なる 2 名の翻訳者によって行われることが決められています。このため、フィグの翻訳には、通常の翻訳よりもより多くの経費と時間が必要となります。今後ともフィグ・ヤーパンの翻訳出版活動をご支援いただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

□ 訃報 □

今年の 7 月 19 日、フィグ・ヤーパンのメンバーであった三俣常彦氏が逝去されました（享年 56 才）。その信じがたい悲しい知らせは、記録的な猛暑の最中に届きました。彼はいつものように出かけた山仕事の途中に、熱中症による心不全で倒れました。

フィグの本に触れた彼は、農的生活を求め京都から岡山の田舎に移住しました。岡山では食料やエネルギーを自家生産し、様々な工夫を凝らした田舎暮らしを実践していました。実直で明るい彼の周囲には、友人が絶えませんでした。いつしかフィグの読者も一人、また一人と訪れるようになり、責任を感じた彼は、ついにフィグ・ヤーパンのメンバーとしてミッションの責任を引き受けることを決意しました。東京近郊で行われる毎月の総会には、岡山から 3 日をかけて参加していました。

倒れる直前まで、『宇宙の深遠より』の最終校正を担当し、さらに、本誌にも掲載した巻頭言をビリーから頂いたのも、彼の功績でした。しかし、その出版を待つことなく命を削るように、成し終えた原稿に埋もれるように旅立ちました。それは本の印刷が開始されたという知らせを受けとった直後だったのです。一冊の本の出版に、彼の生命が込められていることを、いつまでも心に留めたいと思います。

出版物のご案内

■ 宇宙の深遠より —地球外知的生命プレアデスとのコンタクト（徳間書店刊）

価格 2,940 円（税込、送料別 550 グラム）

全国の書店でもお求めいただけます。

■ フィグ・ヤーパン通信

価格 各 300 円（税込）

1 号（送料別 45 グラム） 2 号（送料別 225 グラム）

3 号（送料別 55 グラム） 4 号（送料別 70 グラム）

5 号（送料別 65 グラム） 6 号（送料別 40 グラム）

7 号（送料別 60 グラム） 8 号（送料別 70 グラム）

9 号（送料別 55 グラム） 10 号（送料別 85 グラム）

■ 日本語版 水瓶座時代の声

83/1号 (特集)

価格 1000円 (税込, 送料別 100グラム)

83/2号 (特集)

価格 1000円 (税込, 送料別 100グラム)

87/1号 (特集)

価格 1000円 (税込, 送料別 140グラム)

91/1号 (特集)

価格 1000円 (税込, 送料別 100グラム)

■ 第235回会見 新刊!!

価格 500円 (税込, 送料別 60グラム)

■ 日本語版 FIGU 公報

6号 価格 500円 (税込 送料別 90グラム)

7号 価格 500円 (税込 送料別 95グラム)

29号 価格 500円 (税込 送料別 155グラム)

30号 価格 500円 (税込 送料別 155グラム)

38号 新刊!!

価格 500円 (税込 送料別 160グラム)

■ 精神と物質の生命

価格 500円 (税込, 送料別 55グラム)

■ 切なる願い

価格 100円 (税込, 送料別 25グラム)

■ F. I. G. U. 要綱

無料 (送料のみ 30グラム)

■ 人口過剰問題配布用冊子

人口過剰との闘い

価格 100円 (税込, 送料別 70グラム)

拷問と死刑・人口過剰

価格 100円 (税込, 送料別 70グラム)

人口過剰爆弾

価格 100円 (税込, 送料別 70グラム)

■ ビデオ

ギドー・モースブルッガー東京講演

価格 3200円 (税込, 送料別 390円/個)

ギドー・モースブルッガー札幌講演

価格 2100円 (税込, 送料別 390円/個)

□ 書籍のご注文について □

すべての書籍のご注文は、郵便振替にて承っております。ご希望の書籍代金に送料を加えた金額を、お近くの郵便局から下記フィグ・ヤーパンの口座宛にお振込みください。なお、現金書留および切手同封による直接のお申し込みはご遠慮ください。

□ ご注文の手順 □

- (1) 注文する書籍の題名と冊数を確認し、合計金額を算定する。

(2) 書籍の合計重量を計算し、送料を算定する。

(3) 郵便局で振替用紙をもらい、下記のとおり記入する。

(4) (1) + (2) の合計金額を振り込む。(振り込み手数料は各自ご負担願います。)

代金振り込みの際は金額をお間違えないよう、よくお確かめください。入金確認後に発送いたします。なお、すべての書籍は消費税込みの価格となっておりますので、消費税を計算する必要はありません。

□ 郵便料金表 □

50グラムまで 120円	500グラムまで 310円
75グラムまで 140円	750グラムまで 340円
100グラムまで 160円	1000グラムまで 380円
150グラムまで 180円	1500グラムまで 450円
200グラムまで 210円	2000グラムまで 520円
250グラムまで 240円	2500グラムまで 590円

□ 振込用紙の記入欄 □

口座番号：00160-4-655758

加入者名：FIGU-JAPAN

(アルファベットで記入して下さい)

金額：送料を含めた合計金額

払込人：あなたの住所、氏名、電話番号

通信欄：購入する書籍名と冊数

フィグ・ヤーパン通信 第11号 (無料)

発行日 2002年7月1日

発行 フィグ・ヤーパン (FIGU-JAPAN)

住所 〒192-0916

東京都八王子市みなみ野 3-11-2-305

電話 0426(35)3741

FAX 0426(37)1524

URL <http://jp.figu.org/>

E-mail jp@figu.org

郵便振替 00160-4-655758

加入者名 FIGU-JAPAN

本書の全部または一部を無断で複写複製することは、著作権法上の例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、フィグ・ヤーパンにご連絡ください。

Copyright (c) 2002 by FIGU-JAPAN. All rights reserved.